

【①表現内容-E: 表現対象】

■私って、今どこにいるの？

—現代も昔も人間は想像力と好奇心の塊—

インターネットを使って授業をすると、子どもたちから「〇〇アースっておもしろいよね。」と盛り上がっている会話をよく耳にする。

これは、「Global Positioning System : 全地球測位システム」といって、アメリカ合衆国が軍用に打ち上げた約 30 個の GPS 衛星のうち、上空にある数個の衛星からの信号を受信機で受け取り、現在位置を知るシステムである。

子どもたちのみならず、我々大人の生活にもかなりの勢いで浸透しつつある。宇宙から覗いた地球の中で自分の家を屋根の色まで確認できるようになっている。

つい先日の報道では、まるで△△通りに立っているかのように上下左右 360° を眺めることができるようになったことを知り、もはや目にできない物などないような錯覚すら覚える。たしかに、GPS で自分の位置を知る楽しさに共感しないわけではない。だが、残念なことに私には視点を変えた写真集に見える。むしろ自分を確認しづらくなった気さえする。

私たちは自分の目に映る光景を絵や写真で表し、訪れたことのない異国や見えない世界を豊かな想像力で描いてきた。その好奇心を抑えきれずに画材を背負って長い旅に出た多くの画家もいただろう。

また、古代から自分たちを世界の中心に位置づけ、取り巻く世界を描いてきた地図を考えてみる。例えば、オーストラリアで発行される南極を上部に配置した世界地図と、グリニッジ天文台を 0 度とする大西洋を中心にした北米の世界地図を見比べれば、製作者の世界観の違いは明らかだろう。GPS の中での私は宇宙遊泳している。

映像の斬新さと便利さを楽しむ子どもたちに「私って、今どこにいるの？」という題材で絵に表してもらおう。何度も転びながら練習した自転車で初めて辿り着いた隣町の風景。友だちと赤い物だけを触って帰った通学路の地図。初めて乗ったヨットで海図を見ながら、地球の 7 割を占める広大な世界があることを知って感動した絵。

何でも知っているつもりの私になかった視点を発見し、もう一度新たな自分を覗き込む楽しさ。じつは、隣の席に座る友だちと「何の作品をつくっているの？」と話し合う毎日の場面にこそ自分の位置を知る楽しさが隠れているのかもしれない。

おおびつげたか
(大櫃重剛：東京学芸大学附属世田谷小学校教諭)